



月報

No. 439
2016年
12月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目 34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『神がまず私たちを愛したから』

ヨハネの手紙 一 4章7節～21節

小河信一 牧師

この礼拝では、ヨハネの手紙 一 の講解説教を引き続いて行うとともに、今日、召天者記念礼拝であることを覚えて、御言葉に耳を傾けたいと思います。先に召天された方々は天の国にあって安らいでおられます。私たちもまた、勝利の主、イエス・キリストと共に天の国を目指して歩んで行きましょう。

前段の部分（I ヨハネ 3:11,23）を含めて、この箇所の子題は、互いに愛し合うということです（4:7,12）。コリントの信徒への手紙 一 13章の愛の賛歌と相並んで、美しい韻律に乗せて愛が奏でられています。ヨハネの手紙 一 4:7-21には、繰り返し「愛する」という言葉が出て来ます（合計14回）。初代の教会が、いかに神の愛と、そこで池の波紋のように湧き起こってくる隣人愛を重んじていたか、ということが分かります。だからこそ、主イエス・キリストの十字架と復活の愛によって救われ、それに応答する者として、互いに愛し合うことが、^{かさ}重ね^{がさ}重ね勧められているのです。

そして今、全5章のこの手紙は、結びに向かっています。単なる繰り返しではなく、「互いに愛し合いなさい」ということが、終わりにふさわしい形で、福音理解の深いところから説き明かされています。つまり、終わりの時を見据えつつ、神の愛にとどまりなさい、と教えられています。

ところで、「互いに愛し合いなさい」という隣人愛が説かれるときに必ず引用されるのが、レビ記 19:18 です。

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

数々の律法が列記されている文脈を注意してたどると、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」の前に、「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない」と書いてあることが分かります。さらに、前節(19:17)で、「心の中で憎んではならない」と戒められています(参照：Iヨハネ4:20)。すなわち、旧約の律法家は愛を語る前に、憎しみ、復讐、恨みというものに心を留めています。「隣人を愛しなさい」と命じられても、なお人間の本性において私たちは、愛とは真逆なものに惹かれてしまう、ということです。

「復讐してはならない」の後の「民の人々に恨みを抱いてはならない」は実は、意味深長です。その直訳は単に「あなたの民の子らに向けて(何をという目的語は無し!)保つてはならない」です。直前に、復讐がありますから、それを受けて、恨んで仕返しするような心を「保つてはならない」と解した新共同訳は妥当です。

興味深いのは、何の限定(目的語)も無しに、この「保つ」(to keep)という動詞が出て来たときには、多くの場合、良心ではなく悪意の保持が昭示されていることです。すなわち、この例のように「恨みを保つ」、他の例では「憤りを保つ」(エレミヤ書3:5,12、ナホム書1:2)というように……。

このようなさりげない語法は、人間の本性を暴き出しています。私たちの罪性において、裸の人間において、どんな人間の感情が「保たれやすい」でしょうか？

喜び、希望、愛、感謝でしょうか。そう答えられる人は幸いです。しかし、その人は、自分の罪深さと向き合っていないかもしれません。

それとも、憎しみ、恨み、怒りでしょうか。もうあの人のことを憎むのは止めようと思う、清らかな人間になろうと、決心する、それで終わりになりますか。もうその人のことを憎しみのうちに思い出しませんか。なんと怒りが溜まりやすいことか、持続しやすいことか、それが、私たちの悩みのもとと言えましょう。それらの悪意は自分にまわりついて、なかなか離れません。

レビ記の律法家は、そう簡単にはいかない、憎しみや怒りこそ「保たれやすい」、しつこいものだと見抜いています。それ故に、「憎んではならない」、「復讐してはならない」を重ねて、その他もろもろの悪意を「保ってはならない」と釘を刺したのです。そして打って返して、律法家は「隣人を愛しなさい」と、私たちの歩み出す方向を指し示しました。

レビ記 19:18——

自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

憎しみや怒りこそ「保たれやすい」という私たちの罪性のゆえに、隣人を愛することは、ここに勧められているようには、なかなかできません。互い愛し合うことは逆に、「保たれにくい」、長続きしないのです。自らを省みて、人が自力で誰か人を愛そうとする、その愛は期間限定であると言わざるを得ません。それは、相手が自分に好意を持っているようだ、それならば、自分もその人に好意をあらわそう、という条件付きで暫定的な、真の愛らしからぬものです。

それ故に、この隣人愛の教えは、主イエス・キリストによる救いの出来事によって、捉え直す必要があります。例えば、ヨハネの手紙 一 4:10 の中の句を添えて読み返してみましょう。

「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました」（Iヨハネ 4:10）ので、わたしたちはその愛に^{かなめ}応えて、「自分自身を愛するように隣人を愛しましょう」（レビ記 19:18）。

「その愛に^{かなめ}応えて」というところが、要ですが、すぐれた説教者ヨハネは、「愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」（Iヨハネ 4:11）と、重複をいとわずに、神の愛から隣人愛へと展開しています。

一口で言えば、「神がまずわたしたちを愛してくださった」（Iヨハネ 4:19）ことを、あなたの土台としなさい、ということです。その偉大なる神の愛に^よ拠らなければ、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」という教えを私たちが全うすることはできません。

ヨハネの手紙 一 4:20——

「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。

手紙の著者ヨハネは、人を「憎む」ということを真摯に考えるように問いかけています。

「神を愛している」と言いながら、仮面をかぶるように、心の奥底で人を憎んでいる者がいます。誰も初めから、仮面をかぶろう、偽ろう、とはしていないのかもしれませんが。しかし、ヨハネの教会には「目に見える兄弟」を愛しているとは言い難い人がいたようです。

人を憎む、人に対し偽るという人の罪深さを見つめる説教者ヨハネは真剣です。ヨハネは、罪人が救われること、あるいは、教会員が罪を悔い改めることを心から願っています。その意味で彼は、救い主なる神の愛に根ざして、人を「愛しています」。

表面には愛が見えるが、内側には憎しみが宿っているというような悲惨な状態を、信仰者が免れるように、ヨハネが強い調子で語っています。

ヨハネの手紙 — 4:18—

愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。

「完全な愛」は、愛なのか憎しみなのか分からないような生半可な状態をシャット・アウトします。「完全な愛」を妨げる元凶げんきょうとなっている恐れが締め出されるならば、神の愛の支配のもとに、私たちの間に隣人愛が全うされるのです。

ヨハネの手紙 — 4:12—

いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

ここで、「全うされている」（他に I ヨハネ 2:5、4:17,18）というのは、「目標に到達している」、すなわち、「完成されている」という意味です。

先に、人間が自力で他者を愛そうとする愛は、結局は期間限定のものである、と指摘しました。それに対し、「神の愛」は、〈初め〉から〈終わり〉まで全うされる愛、永遠の愛です。

その神の愛の〈初め〉と〈終わり〉は、次のように説明されます。すなわち、天地創造の〈初め〉から、あるいは、罪人なる私が救い出され、洗

礼の恵みにあずからせていただいたその〈初め〉から、最後の審判を受け、御国に入ることを許されるその〈終わり〉まで、ということです。

信仰の小さく^{とほ}乏しい自分には、なかなか〈終わり〉までは見通せない、とつぶやく人がおられるでしょうか。父なる神は、そのような一人ひとりのために「御自分の霊を分け与えて」（Iヨハネ 4:13）くださっています。つまり、私たちが聖霊の満たしを受けるならば、私たちは終わりの終わりに至る神の愛というものを、霊的に仰ぎ見て、信じるようになるのです。

今日まさに、召天者記念礼拝という観点から言えば、〈初め〉から〈終わり〉まで貫かれている神の愛によって、私たちは天の国に安らいでおられる先達、先に天に召された方々との交わりが結ばれます。私たちは今、天の国におられる人々と出会っているわけではありませんが、〈終わり〉の時、やがて神の愛と互いに愛し合うという愛に包まれて、再会する希望が与えられています。

先に挙げたヨハネの手紙 一 4:12には、「いまだかつて神を見た者はいません」という、一見、私たちの信仰をくじくような句が出て来ました。しかし、これは一つの説教・弁論術の技法で、神を見ていないという否定の句を前置することによって、後の句を強調しています。がっかりするのは、早計です。

ヨハネの手紙 一 4:14——

わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証^{あか}ししています。

罪性に染まった私たちに見えないものがあるのは、確かです。その典型が、私たちの思いをはるかに超えた偉大なる神の働きです。しかし、父なる神は、私たちの目を開いてくださり、私たちの目に見えるような形で、神の出来事を示してくださいました。それこそが、「御父が御子を世の救い主として遣わされたこと」です。十二弟子のペトロたちはその証人です。

ヨハネの手紙 一 の冒頭「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で①見たもの、②よく見て、手で触れたものを伝えます」（1:1）には、二度「見る」が置かれています。本来、「御父が御子を世の救い主として遣わされたこと」は信じるべきことですが、受肉されたイエス・キリスト（Iヨハネ 1:2、4:2）との出会いによって、多くの人々が、主を「見

た」のです。そして、主を「見た」人は、主の証人となって伝道し、見ずして信じる信仰者（参照：Iペトロ 1:8、ヨハネ 20:29）を育てました。

主イエスは、恐れや憎しみを締め出すことの出来ない私たちを救い出すために、肉となって私たちの目の前に来られました。私たちは、まことの命がこの世に輝いたことを見たと言うペトロやヨハネの目撃証人の信仰に連なる者であります。

私たちは、聖餐式を通して、キリストの臨在または天のキリストとの霊的な交わりにあずかっています。聖餐のパンと杯さかずきは、キリストの、目に見えるしるしです。私たちもまた、信仰の目、霊の目によってキリストを「見る」ことが許されています。大切なことは、私たちがキリストを信じることによって、「神は愛である」（Iヨハネ 4:16）という神の宣言を、私たちの実生活の中に反映していくことです。私たちが再臨の主キリストを望み見て、今の日々を生きる大切さがあらわされている次の節を読んでみましょう。

ヨハネの手紙 一 4:17――

こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。

ここでは、互いに愛し合うことが、「わたしたちの内に」、具体的な形となって日々実践されているかどうかが問われています。私たち、各々が愛の波紋を拡げているか、あるいは、各々が神の愛の通り良い管かんとなっているかが問われています。

そして、互いに愛し合うことを繰り返し説いてきたヨハネの手紙 一 は、手紙の終わりにふさわしい見通しに立って教えています。

「裁きの日に確信を持つことができます」と言う、その「裁きの日」は、終わりの時の審判を指しています。

その審判の日に、救われた罪人、互いに愛し合う愛に生きた人の側に立つのか、あるいは、救いを拒こばんだ者、愛の仮面をかぶった偽り者の側に立つのか、人間は二つに分かたれます。私たちの心に不安や恐れを呼び起こしかねない「裁きの日」です。

しかし、手紙の著者ヨハネはこの日に向けて、「確信を持つ」こと（他に I ヨハネ 2:28、3:21）が出来ると言います。それは、今もう決定済みであるという、天国への通行手形ではありません。

私たちは今、天地創造から最後の審判に至る途上を歩んでいる者です。そこでの最高の私たちに対する守り・保護は、すでにヨハネが説いた通り、〈初め〉から〈終わり〉まで貫かれている神の愛です。その神の愛に根ざして生きることが、「裁きの日に確信を持つこと」にほかなりません。だからこそ、私たちは、天の国にいる愛する者との再会を待ち望むのです。

私たちは、どこから来てどこへ行くのか、神の愛の中で見通しが与えられていますから、不安に動じることなく安んじていられます。

私たちは、天地創造から主イエス・キリストの十字架と復活へ、そして今、終わりの時へ向けて、中間の道を歩んでいます。〈初め〉から〈終わり〉まで見通しをつけてくださる神の御力に寄り頼み、神の愛を信じ、互いに愛し合う者になりたいと願っています。教会の先達である召天者が、罪の誘惑とさまざまな労苦を乗り越えて、天の国を目指して行かれたことは、私たちへの励ましとなっています。

こうなってはならないというヨハネの戒め（I ヨハネ 4:20）を、自分への警告として受け止めることができますように、私たちは罪深い者であり弱く貧しい者ですが、神が愛を全うしてくださるという福音・喜びの知らせによりすがる者となれますように、お祈り致します。

茅ヶ崎香川教会月報

No. 439

2016年12月25日発行

編集発行：日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会

発行責任者：小河信一

編集責任者：鈴木隆二